

詩と「苦痛」——ミシェル・ウエルベック『幸福の追求』を読む

伊藤琢麻（ソルボンヌ・ヌーヴェル大学）

今では小説家として名声をほしいままにしているミシェル・ウエルベックの文学活動は、詩とともに始まったと言っても過言ではない。1988年、彼は雑誌『新パリ評論』に「私の内の何か」という題のもと七つの詩篇を発表した。続いて、その三年後の1991年に出版された詩集『幸福の追求』で、作家のアンドレ・ダルルと彼の妻で詩人のジュリエット・ダルルが創設したトリスタン・ツァアラ賞を受賞した。1996年には『闘争の感覚』でフロール賞も受賞した。このように、彼の初期文学活動を支えたもののひとつが詩であったのは疑いようのない事実である。

さらに『闘争領域の拡大』（1994年）や『素粒子』（1998年）の刊行以後にも、ウエルベックは1999年に『ルネサンス』、2013年に『最後の岸壁の構成』という詩集を出版している。これらの詩集に加え、2014年には『和解することなく』と題された自選アンソロジーがガリマール社のポエジー叢書から出版されているし、2020年には『生きてあり続けること』（1991年初出）、『闘争の感覚』、『幸福の追求』、『ルネサンス』、そして『最後の岸壁の構成』が一冊に収められた文庫本『ポエジー』の最新版が、フラマリオン社の一部門に属する文庫本版元「ジェ・リュ」から出版されている。詩集出版を別にしても、ラジオ・フランスが運営する「フランス・キュルチュール」のラジオ番組で詩について語ったり、ロン＝ポワン劇場で詩のソワレに出演したり、詩人アンドレ・ヴェルテルが編纂し1999年にガリマール社から出版された『オルフェ・スタジオ——声を上げて読む今日の詩』というアンソロジーにエドゥアール・グリッサンやベルナール・ノエルらとともに名を連ねたりと、彼の詩にかかわる活動は枚挙に暇がない¹。以上のように、小説の場合と異なり邦訳こそないが、ウエルベックは継続的に詩に携わり続けているのである。

しかも処女詩集『幸福の追求』が、処女小説『闘争領域の拡大』よりも三年前に出版されているという事情を踏まえると、ウエルベックの小説作品を読み解くためにも、彼の詩の読解は役立つと考えられる。事実、アガト・ノヴァク＝ルシュヴァリエが『ウエルベック、慰めの芸術』のなかで試みたように、ウエルベック作品には小説的なものと詩的なものの交流がある²。また、ギリシア出身で、1980年からパリで活動をしている作家ラキス・プロギディス宛の手紙のなかで、ウエルベックは詩の役割について次のように書いている。

「[...] 詩には果たすべき役割があると直観しています。それはおそらく、化学における一種の前駆体としての役割です。詩は小説だけに先立っているわけではなく、より直接的な形で、哲学にも先立っています。³

¹ これらの活動については、次のアンドレ・ヴェルテルのテキストに詳しい。André Velter, « Fil rouge », in Michel Houellebecq, Paris, Éditions de l'Hermès, 2017, p. 61-64.

² Agathe Novak-Lechevalier, *Houellebecq, l'art de la consolation*, Paris, Stock, 2018, p. 255-258.

³ Michel Houellebecq, « Lettre à Lakis Proguidis » in *Interventions 2020*, Paris, Flammarion, 2020, p. 154. [ミシェル・ウエルベック「ラキス・プロギディスへの手紙」『発言集』、西山雄二、八木悠允、関大聡、安達孝信訳、白水社、2022年、116頁。]

なぜ詩が小説や哲学に先立つとウエルベックは考えているのだろうか。フランスの美術批評家兼作家のジャン＝イヴ・ジュアネ、およびフランスの作家兼芸術家のクリストフ・デュシャトレとの対談で「小説というジャンルを選んだにもかかわらず、あなたは詩を自然に参照しているようにみえます」という質問をインタビュワーから投げかけられたとき、ウエルベック自身が次のように答えている。

詩はある瞬間の純粋な直観を表すのにもっとも自然な方法です。純粋な直観の核が実際にあり、イメージや言葉で直接表すことができます。詩のなかにとどまっているかぎり、私たちは真実のなかにもとどまっているのです。⁴

つまり、少なくともこの対談が発表された1995年の時点では、詩とはウエルベックにとって真実に関わるものである。この意味で、彼の作家活動において詩が重要な位置を占めていたのはたしかだと言える。この事実は、ウエルベックが小説家なのか詩人なのかという結論を与えること以上に、彼の作品の全体像を知るために、詩の読解が不可欠であるということを示している。

本稿の目的は、詩集『幸福の追求』所収の詩篇を中心に読解し、ウエルベックの詩の主題や解釈の指針を明るみに出すことである。その際にとりわけ注目することになるのが、「苦痛」という言葉である。この「苦痛」という言葉を、三つの観点から分析する。まず、『生きてあり続けること』と『幸福の追求』の詩篇を対象に、ウエルベックが詩の源泉であると考え「苦痛」を「構造」という観点から分析する。ついで、『闘争の感覚』の詩篇と『幸福の追求』の詩篇を対象に、ウエルベックとボードレールの比較を行いながら、「苦痛」と「酔い」の関係について考察する。最後に、『幸福の追求』の詩篇を対象に、ウエルベックの詩に含まれる矛盾について指摘しつつ、「苦痛から逃れる場所」の可能性を模索する。

1. 「苦痛」と「構造」

ウエルベックの詩の対象となるのは、現代生活に特有のもの——たとえばスーパーマーケット、パリの通り、カフェやレストラン、高速道路、失業者向けの補助金といった類のものである。こうしたウエルベックの詩を論じるには、彼の複数の詩集が一冊にまとめられた『ポエジー』の巻頭を飾り、もともと1991年にラ・ディフエランス社から出版された『生きてあり続けること』から読み始めるのが良いだろう。この著作の副題「方法論」は、まさしく彼の詩を分析するためのひとつの方法を提示してくれるからである。その第一部には「はじめに、苦痛」という題がつけられており、冒頭で「世界とは押し広げられた苦痛である⁵」と述べられている。万物に共通する「苦痛」が失われることのないこの世界で、意識が一定の水準に達すると、叫びが生じる。ウエルベックによると、詩はそこから派生するものである⁶。したがってウエルベックの詩について考えることは、事物の起源、すなわち「苦痛」へと遡るということになる⁷。詩を生み出すと

⁴ Michel Houellebecq, « Entretien avec Jean-Yves Jouannais et Christophe Duchâtelet », *Ibid.*, p. 59. [ミシェル・ウエルベック「ジャン＝イヴ・ジュアネとクリストフ・デュシャトレとの対談」同書、49頁。]

⁵ « Le monde est une souffrance déployée. » Michel Houellebecq, *Rester vivant*, in *Poésie*, Paris, Flammarion, 2020, p. 11.

⁶ « Les êtres se diversifient et se complexifient, sans rien perdre de leur nature première. À partir d'un certain niveau de conscience, se produit le cri. La poésie en dérive. » *Ibid.*

⁷ « La première démarche poétique consiste à remonter à l'origine. À savoir : à la souffrance. » *Ibid.*

いう理由で、「苦痛」は必ずしも悪いものとしてのみ捉えられるわけではない。事実、ウエルベックは次のように書いている。

Les modalités de la souffrance sont importantes ; elles ne sont pas essentielles. Toute souffrance est bonne ; toute souffrance est utile ; toute souffrance porte ses fruits ; toute souffrance est un univers⁸.

苦痛の様態は重要である。それが本質的だというわけではないにせよ。どんな苦痛も良く、どんな苦痛も有益であり、どんな苦痛も成果を上げる。あらゆる苦痛がひとつの宇宙なのだ。

問題は「苦痛」がどのように有益で、どのような成果を上げるのかを知ることである。この引用箇所続き、「苦痛」の様態の例として三人の少年の名が挙げられる⁹。ひとり目は一歳のアンリ。この赤ん坊は、床に寝そべり、おむつを汚したまま悲鳴を上げる。夜の約束へと出かけるために洋服を探しているアンリの母親は、この赤ん坊に腹を立てており、彼女もまた叫び始める。母親の叫び声を聞いて、アンリはより一層激しく叫びだす。このような境遇にある赤ん坊が、詩人のキャリアに順当に足を踏み入れるのだとウエルベックは書く。

二人目は十歳のマルク。彼は、癌で死期が迫っているため入院している父親に対して、愛する気持ちと死を願う気持ちのアンビバレントな感情を抱いている。ウエルベックは、マルクがこの「非常に神聖な罪悪感」を発展させる必要があると指摘する。

三人目は十五歳のミシェル。彼は女の子と一度も接吻したことがない。シルヴィという少女と踊りたいのだが、彼女は別の少年パトリスと楽しく踊っている。ミシェルの硬直した心の奥底まで、音楽が入り込んでいく。彼の子供時代はこれまで幸せで、人がこれほど苦しむものだとは知らなかったのである。苦痛で硬直した心と音楽の感動的な美しさの対比をミシェルは決して忘れないだろう、とウエルベックは書く。

このように「苦痛」の具体例として挙げられているのは、言葉にならない赤子の叫び、生と死を同時に願うというアンビバレントな感情、そして苦しみと美の対比である。そしてそのいずれもが、幼年期から思春期にかけての時代に経験されるものとして例示されている。特にアンリの例に顕著のように、こうした「苦痛」は詩人と結びつけられていることもわかる。つまり詩人であるためには、子どもの時分より、「苦痛」を絶えず感じていなければならないということになる。こうした「苦痛」を大切にすることは、人間社会でまともと言われる生き方と相容れないことを意味する。ゆえに、「詩人になることを学ぶことは、生きること^{デザブランドル}を忘れることだ¹⁰」とウエルベックは書くのである。彼の小説に頻出する、社会的、経済的、性的序列の劣った地位に自らを位置づけることもまた、こうした「苦痛」をとまなう生の一例であると言えよう¹¹。

だがウエルベックが、自己陶醉を最優先するダンディズムや破滅的なデカダンスを推奨しているわけではないという点には注意が必要である。反対に、「苦痛」をあるがままにしておくわけにはいかない。なぜな

⁸ *Ibid.*

⁹ *Ibid.*, p. 11-12.

¹⁰ « Apprendre à devenir poète, c'est désapprendre à vivre. » *Ibid.*, p. 13.

¹¹ 『闘争領域の拡大』では、思春期は大事な時期だがいずれにせよ一部の短い期間でしかないという主張に対して、「思春期は人生の大事な時期であるだけでなく、人生について、その言葉の十全な意味で語ることのできる唯一の時期でもある」という反論がなされる。 Voir: Michel Houellebecq, *Extension du domaine de la lutte*, Paris, Maurice Nadeau, 1994, p. 92.

らこの「苦痛」は詩人に死をもたらす恐れがあるからである。『生きてあり続けること』の第二部「関連づけること」の冒頭で、ウエルベックは次のように書いている。

Si vous ne parvenez pas à articuler votre souffrance dans une structure bien définie, vous êtes foutu. La souffrance vous bouffera tout cru, de l'intérieur, avant que vous ayez eu le temps d'écrire quoi que ce soit¹².

もし十分定義された構造のなかに自分の苦痛を関連づけられないなら、君は終わりだ。何かしらを書く時間をもつ前に、苦痛は君をまったく生^{なま}のまま、内側から食らう。

もし「苦痛」をそのままにしていたら、詩人は自死へと向かうことになる。したがって、自身を内側から蝕む「苦痛」に対抗するために、詩人は防壁を築かねばならない。そこでウエルベックが拠り所にするのが、「構造」である。事実、上記の引用文に続くかたちで「構造は自殺を阻止する唯一の手段である¹³」と書かれている。そしてこの「構造」は即座に詩における「構造」、すなわち韻律と結びつく。

Croyez à la structure. Croyez aux métriques anciennes, également. La versification est un puissant outil de libération de la vie intérieure¹⁴.

構造を信じよ。同じく、古くからある韻律を信じよ。詩法は内的生を解放する強力な道具なのである。

この引用文によって、ウエルベック自身が「構造」と「古くからある韻律」を同一視していることが示される。フランス詩の歴史を大まかに眺めてみると、ウエルベックの主張は興味深いものであると言えよう。なぜなら十九世紀以来、伝統的で定型的な韻律を批判し、新しい韻律を発明しようとしてきた詩人が少なくないからである。たとえば十九世紀の散文詩や自由詩、二十世紀前半のキュビズム、未来派、ダダ、シュルレアリスム等の前衛詩、二十世紀後半のウリポの実験詩、レトリズム以降の音声詩、パフォーマンスとともに演じられる行動詩等はいずれも、新しい韻律の発明という目的と多かれ少なかれ関連してきた。「古くからある韻律」のほうを重視せよと語るウエルベックは、こうした詩的潮流に逆らっているように思われる。

多くの研究者が既に指摘してきたように、ウエルベックの詩篇はアレクサンドラン（十二音節詩句）で書かれ、六音節ごとに句切れのあるものが多い。これは、フランス詩で最も古典的な韻律のひとつである¹⁵。ウエルベックの詩は、現在存命中のフランス詩人にも見られる定型詩への回帰の一例なのだろうか¹⁶。おそ

¹² Michel Houellebecq, *Rester vivant*, op. cit., p. 17.

¹³ « La structure est le seul moyen d'échapper au suicide. » *Ibid.*

¹⁴ *Ibid.*

¹⁵ 『フランス詩事典』でのジャック・シャルパントローの説明によると、アレクサンドランは十六世紀のプレイヤード派の詩人たちによって普通に使われ出し、十七世紀には「フランス詩の古典的な詩句として [comme le vers classique de la poésie française]」認められることになった。Voir: Jacques Charpentreau, *Dictionnaire de la poésie française*, Paris, Fayard, 2006, p. 24-25.

¹⁶ 現在存命中のフランス詩人の具体例として思い描くのは、ヴァレリー・ルーゾとピエール・ヴァンクレールである。2002年に詩集『どこへいく』でウエルベックと同じトリスタン・ツァラ賞を受賞したルーゾは、2012年の詩集『ヴルーゾ』〔著者名 Valérie Rouzeau の略〕を詩節分けのない十四行詩で書き、「私がいりなりいなかったりするソネットによる自伝」を実践した。ヴァンクレールも、詩集『宛先なし』（2019年）や『世界の外出規制』（2020年）をソネットで書き、枠にはめられた形式の中に見出すことが可能な自由や、さまざまなタイプの人にとって親しみやすい詩の形式を探索した。

らくそうではない。その理由は、ウエルベックの詩句は必ずしも通常のアレクサンドランであるというわけではないからだ。『ミシェル・ウエルベック、その実態』の著者ドミニク・ノゲーズは、ウエルベックのアレクサンドランの特徴として、十二音節を超えてしまう場合があるという点を指摘している。

[...] pour cause d'e muets tantôt prononcés et tantôt non, ou de liaisons tantôt faites et tantôt non, les alexandrins de Michel Houellebecq ont parfois treize, quatorze, voire quinze pieds.¹⁷

[...] 無音の「e」が発音されたり発音されなかったり、リエゾンされたりされなかったりするので、ウエルベックのアレクサンドランは十三、十四、さらには十五音節になったりする。

通常、詩句内の無音の「e」は発音され、詩句の最後の語の語尾の無音の「e」は発音されないという韻律の規則がある。だがウエルベックの場合、この規則が守られたり守られなかったりする。したがって、あるときは十二音節に収まるアレクサンドランが、あるときはそれ以上の音節、つまり十三、十四、さらには十五音節になったりするとノゲーズは言うのである。

もっとも、古典主義文学の理想を説いた『詩法』の著者ニコラ・ボアローの作品でさえそうである、とノゲーズも書いているように¹⁸、破格や二重母音を分けて発音する分音はウエルベックの詩篇に限ったものではない。だが発音されない無音の「e」を詩の内部に置いたり、母音を省略したりする場合、その音を省略する表記法があるのも事実である。たとえば破格を用いて多くの詩を書いた十九世紀の詩人トリスタン・コルビエールは「復讐」という詩篇で、語尾の無音の「e」を視覚的に省略し、「encore」を「encor」と表記している¹⁹。こうした省略技法があるにもかかわらず、ウエルベックはそれを用いず、規則を超えてしまう音節をそのままにしている。それゆえ、十二音節であるべきはずの詩句が、時折十三、十四、十五音節として読めてしまうのである。このウエルベック流のアレクサンドランを、特殊だと呼んでも差し支えないだろう。

ここからは具体的な詩篇を例に、ウエルベックの特殊なアレクサンドラン、すなわち彼の詩の「構造」について考えてみる。読解対象は『幸福の追求』所収の「大型スーパーマーケット——十一月」という詩篇である。この詩篇にはウエルベック的な主題と「構造」の問題が同時に含まれている。その全文を次に掲げよう。

D'abord, j'ai trébuché dans un congélateur.

私はまず、冷凍庫につまずいた。

Je me suis mis à pleurer et j'avais un peu peur.

涙が零れ始め、すこし不安になった。

Quelqu'un a grommelé que je cassais l'ambiance ;

私が雰囲気壊していると、誰かがけちをつけた。

Pour avoir l'air normal, j'ai repris mon avance.

平静を装い、私は再び前に進み出した。

Des banlieusards sapés et au regard brutal

郊外居住者はめかしこみ険しい目つきで

¹⁷ Dominique Noguez, *Houellebecq, en fait*, Paris, Fayard, 2003, p. 152.

¹⁸ *Ibid.*

¹⁹ Tristan Corbière, « Vendetta », *Les Amours jaunes*, Paris, Glady frères, 1873, p. 117.

Se croisaient lentement près des eaux minérales. 飲料水売り場を徐に行き来していた。
Une rumeur de cirque et de demi-débauche 騒がしく半ば度が過ぎたざわめきが
Montait des rayonnages. Ma démarche était gauche. 陳列棚のほうから聞こえてきた。私の歩みはぎこちなかった。

Je me suis écroulé au rayon des fromages ;
Il y avait deux vieilles dames qui portaient des sardines. チーズ売り場で私は倒れ込んだ。
La première se retourne et dit à sa voisine : そこにはイワシを持った二人の老婦人がいた。
« C'est bien triste, quand même, un garçon de cet âge. » 一方が振り返り、もう一方に言った。
「なんだか陰気ね、あの年頃の少年にしては。」

Et puis j'ai vu des pieds circonspects et très larges ;
Il y avait un vendeur qui prenait des mesures. それからは警戒した様子の非常に大きい足がいくつか見えた。
Beaucoup semblaient surpris par mes nouvelles chaussures ; 措置を講じた店員はひとりだった。
Pour la dernière fois, j'étais un peu en marge.²⁰ 多くの人たちが私の新品の靴に驚いていたようだった。
最後まで、私は少し場違いだった。

はじめに意味内容を確認すると、第一詩節から、この詩がフランスの大型スーパーマーケットを舞台としていることがわかる。スーパーマーケットはウエルベックの小説にも頻出する舞台のひとつである。前述の「ジャン=イヴ・ジュアネとクリストフ・デュシャトレとの対談」では『闘争領域の拡大』を中心にした質問が繰り返されるが、ナイトクラブと比較しつつ、「スーパーマーケットは現代における本物の天国」であるとウエルベックは答えている。

スーパーマーケットは現代における本物の天国なので、闘いはその戸口で終わります。たとえば、貧乏人はスーパーマーケットに入れません。私たちは別のところで金を稼いで、今度は、たいてい信頼できる味で、栄養という観点から情報が十分記された、画期的で多種多様な供給物を目の前にしてその金を使うのです。ナイトクラブが提供する光景はまったく違ったものです。多くの欲求不満の人々が——あ

²⁰ Michel Houellebecq, « Hypermarché — Novembre », *La Poursuite du bonheur*, in *Poésie*, op. cit., p. 143.

なお、当該詩篇の翻訳に関しては、以下の「フランス現代詩研究会」ウェブサイト上に公開されている八木悠允の既訳を参考に本稿執筆者が訳出した (<https://poetique.github.io/2021-12-06-huellebecq/>、最終閲覧日 2023 年 1 月 1 日)。以下、ウエルベックの詩篇の引用はすべて拙訳を用いる。

らゆる期待に反して——そこに通い続けています。そうやって彼らが得るのは、毎分ごとに自分自身の屈辱を確認するという機会です。ナイトクラブで私たちは地獄の間近にいるのです。²¹

期待するものを与えてくれぬナイトクラブが「地獄の間近」であるのに対し、金を払い期待通りのものを手に入れられるスーパーマーケットは「現代における本物の天国」である。この場所で「私」は、まず冷凍食品売りの冷凍庫につまずき、誰かにけちをつけられる。第二詩節では、平静を装いつつ飲料水売り場に移動した「私」が、変わらずにそこでも居心地の悪さを感じていることがわかる。第三詩節では、しまいにはチーズ売り場で倒れ込んでしまう「私」が描かれ、「なんだか陰気ね、あの年頃の男の子にしては」とまで他人から言われてしまう。この「あの年頃の少年」という表現から、「私」が若い男であるということがわかる。さらに最後の第四詩節で「多くの人たちが私の新品の靴に驚いていた」とあるように、少年である「私」が、スーパーマーケットに入れないような貧乏人や浮浪者ではない匿名の現代人のひとりであることもわかる。こうして「私」は、自分を警戒する他人の足や、立ち居ふるまいに落ち着きがない「私」に対応しにやってきた店員を目に捉えつつ、最後まで自分が場違いだったと感じるのである。皮肉なことに、「現代における本物の天国」であるスーパーマーケットに「私」が受け入れられることなく、詩篇は締めくくられる。

この詩篇で対比されているのが、大型スーパーマーケットという現代生活を象徴する場所に居心地の悪さを覚える「私」と、そこに馴染むことのできる他者であるというのは間違いないだろう。両者の不和はさまざまな次元で決定的なものとなる。たとえば、『少し場違いな、詩人ウエルベック』（単著、2020年）や『ミシェル・ウエルベック、詩と散文の間で』（編著、2021年）等の著作でウエルベックの詩を継続的に分析しているオリヴィエ・パラントーが注目するのは、「イワシ」という語の多義性である²²。この語は魚を意味すると同時に、俗語として「勲章」も意味する。老婦人たちは二人とも「イワシ＝勲章」を手にしており、大型スーパーマーケットという戦場で生き残る術に精通している。一方それを持たない「私」は、戦場であまりにも早く倒れ込んでしまったことを非難される。「生きることを忘れること」が詩人の条件として求められると先述したが、この点を踏まえると、スーパーマーケットという戦場での活動準備ができていなかった「私」は詩人になぞらえることができる。このように考えると、詩人は現代生活が営まれる場で生き残ることができず苦しんでしまう、ということになる。「イワシ」という語によって、正しい振る舞いができる郊外居住者や老婦人といった顧客と、それができずに倒れ込んでしまい「苦痛」に苛まれる詩人が対比されているのである。

それでは、こうした「苦痛」を抑え込もうとする「構造」の働きを理解するために、韻律に目を向けたい。まず、富貧の差はあるが脚韻がなされており、第一詩節と第二詩節が平韻で、第三詩節と第四詩節が抱擁韻である。この意味では、脚韻という「構造」には瑕疵がないように思われる。次に音節に注目すると、詩行のほとんどが十二音節で書かれている一方で、この数を超え出るものもある。具体的に言えば、二詩行目は十三音節、十詩行目は十五音節、十四詩行目は十三音節と数えられる。だとすれば、音節という「構造」は

²¹ Michel Houellebecq, « Entretien avec Jean-Yves Jouannais et Christophe Duchâtelet » in *Interventions 2020*, op. cit., p.56. [ミシェル・ウエルベック「ジャン＝イヴ・ジュアネとクリストフ・デュシャトレとの対談」『発言集』前掲書、46-47頁。]

²² Olivier Parenteau, *Un peu en marge : Houellebecq poète*, Montréal, Nota bene, 2020, p. 54.

不完全であるように思われる。もちろん、十二音節と数えることも不可能ではない。たとえば、二詩行目を
 «Je m'suis mis à pleurer et j'avais un peu peur.» と口語的に発音することで十二音節の詩句を生むこともできるし、
 場合によってはウエルベックがそのように記述することさえできたはずである。しかし、こうした無音の
 «e» が文字として残されている以上、ここで考える必要があるのは、どうして「構造」に亀裂が入る原因と
 なる無音の«e»をウエルベックがあえて残しているのかという点である。

ウエルベックの詩における無音の«e»の働きに着眼しつつ、ダヴィッド・エヴァンスは論文「ミシェル・
 ウエルベックの『ポエジー』における構造と自殺」で、前述の詩集『ポエジー』を対象に、ウエルベックに
 おける詩の「構造」の役割を明らかにしようとした。エヴァンスが指摘するのは、無音の«e»によって語尾
 音消失や語中音消失が起きるため、ウエルベックの詩は文語体と口語体の両方に依拠するということである
 23。一方では両者が生むリズムの不均衡のおかげで、ウエルベックの詩の読解は豊かになる。他方、その不
 安定なリズムのせいで、詩人を脅かす自殺の欲望があらわれるとき、「構造」が砕け散ることが明らかになる。
 エヴァンスが例示するのは、『幸福の追求』所収の「安らぎ」という詩篇の以下の詩節である。

[...]

[...]

Et je cherchais des yeux un couteau de cuisine

そして私は包丁を目で探した

Du sang devait couler, mon cœur gonflé de rage

流血の必要があった、心臓は憤怒に満ち

Secouait péniblement les os de ma poitrine.

胸骨を痛ましいほどに揺らしていた。

L'angoisse bourgeonnait comme un essaim de vers

不安が芽吹いた それは皮下に隠れていた、

Cachés sous l'épiderme, hideux et très voraces ;

おぞましい非常に貪婪な蛆虫の群れのようなだった。

Ils suintaient, se tordaient. J'ai saisi une paire

その蛆虫たちが姿を見せ、身をよじっていた。私は一挺の

De ciseaux. Et puis j'ai regardé mon corps en face.²⁴

ハサミを手にした。それから正面から自分の身体を眺めた。

血を流す必要があると感じて包丁を探し、恐ろしい蛆虫のイメージにつきまといハサミを手にしたこの
 「私」が自殺の願望にとらわれていると考えるのは難しくないだろう。この自殺願望を抑え込むために「構
 造」は用いられている。事実、各詩行はアレクサンドランで書かれている。だが、十三音節が時折顔を出す。
 最後の詩句がその例である。エヴァンスによると²⁵、もし読者が韻律の文脈を十分強く感じとっていたなら、
 通常三音節で発音する«regardé»を«r'gardé»と二音節へと縮めることで、音節の数え方が遵守される。もし
 リズムの非定型性に感化されたなら、不揃いな音節で詩を読もうとする。したがって、音節数は読者に依存
 することになる。

²³ David Evans, « Structure et suicide dans les *Poésies* de Michel Houellebecq », in *Michel Houellebecq sous la loupe*, éd. Murielle Lucie Clément et Sabine Marie Elise van Wesemael, Amsterdam, Rodopi, 2007, p. 206.

²⁴ Michel Houellebecq, « Apaisement », *La Poursuite du bonheur*, op. cit., p. 181.

²⁵ David Evans, « Structure et suicide dans les *Poésies* de Michel Houellebecq », art. cit., p. 208.

エヴァンスの議論を踏まえ、「大型スーパーマーケット——十一月」の読解に戻ろう。十二音節を超えてしまう三つの詩行、「涙が零れ始め、すこし不安になった。」、「そこにはイワシを持った二人の老婦人がいた。」、「措置を講じた店員はひとりだった。」は自殺衝動を引き起こすほどのものではないだろう。「安らぎ」の場合と比べると、直接的に希死念慮が書かれているというわけではないからだ。だが、これらの詩行の内の一ひとつにはっきり書かれているように、不安が揺き立てられているのは疑いようがない。スーパーマーケットという社会の一例によって押し付けられる絶望に抵抗するために、詩人は「構造」を築き上げようとする。しかし、そこに読者という第三項が巻き込まれる以上、とりわけこの「構造」は不完全なままにとどまる。読者が巻き込まれることで顕になるのは、ウエルベックが提唱する韻律の「構造」がどれほど不安定で揺らぎやすいものであるかという点なのである。したがって、計算によってあらゆるものに一義的な交換価値が与えられる現代資本主義社会²⁶に詩は相容れないし、詩人はその社会に馴染めないということになる。つまり、パラントーが『ミシェル・ウエルベック、詩と散文の間で』の序文に書いたように、詩は計算がないところでのみ存在可能なのである²⁷。

以上のように、『幸福の追求』所収の具体的な詩篇の読解を通じてわかるのは、『生きてあり続けること』にあった「構造を信じよ」というウエルベックの要請が、逆説的にその「構造」の揺らぎを明らかにしているということである。そしてその「構造」の不完全性ゆえに、「苦痛」は継続することになる。

2. 「苦痛」と「酔い」

ウエルベックの詩で「苦痛」が「構造」を乗り越えてしまうのだとすると、この「苦痛」から逃れる術はないのだろうか。この点について考えるために、「酔い」という別の視角を導入したい。

『生きてあり続けること』の第三部「生き続けること」で、ウエルベックは詩人の生き方について述べている。彼によると、芸術的な次元において、結婚や子育ては叶わない。そのため、またもや詩人は社会から爪弾きされる。その結果、終わることのない「苦痛」に苛まれる。だが、そのような場合に「苦痛」を和らげてくれるのがアルコールである。これについて、ウエルベックは次のように書いている。

D'une manière générale, vous serez bringuebalé entre l'amertume et l'angoisse. Dans les deux cas, l'alcool vous aidera. L'essentiel est d'obtenir ces quelques moments de rémission qui permettront la réalisation de votre œuvre. Ils seront brefs ; efforcez-vous de les saisir²⁸.

一般的に、辛さや不安のあいだで君は激しく揺れ動くことになるだろう。どちらの場合も、アルコールが君を助けてくれるだろう。本質的なこととは、自身の作品を完成させることを可能にしてくれる一時

²⁶ ウエルベックは『発言集』所収の「混乱へのアプローチ」で、計算によってあらゆるものに一義的な交換価値が与えられる現代社会の様子を次のように書いている。「現代を生きる個人は帰属意識や忠誠心、厳格な行動規範といった束縛から解放されることで、全面化した商取引システムのなかでみずからの居場所を確保する準備ができており、そこでは一義的な仕方のみずからに一種の交換価値を与えることが可能になるのだ」。Michel Houellebecq, « Approches du désarroi » in *Interventions 2020*, op. cit., p. 27. [ミシェル・ウエルベック「混乱へのアプローチ」『発言集』前掲書、22-23頁。]

²⁷ Olivier Parenteau, « Introduction », in *Houellebecq entre poème et prose*, Montréal, Presses de l'Université de Montréal, 2021, p. 12.

²⁸ Michel Houellebecq, *Rester vivant*, op. cit., p. 23.

的な鎮静の瞬間を手に入れることなのである。こうした瞬間は短い。だからそれを掴み取れるよう努めるのだ。

読者の介入によって揺らぎが生じるため「構造」を信頼し切るのは難しい、それでもアルコールに頼ることで、詩を完成させるという目的を達成することが可能になるのではなかろうか。なぜならアルコールは、ほんの束の間に過ぎないかもしれないが、辛さや不安を鎮める「瞬間」を与えてくれるからである。

言うまでもなく、元来、詩とアルコールは縁深い関係にある。十九世紀の詩人の多くがアブサンを愛飲していたことは広く知られている。さまざまなウエルベックの作品や発言のなかにも、そのような十九世紀フランスの詩人の名が幅広く登場する。たとえば、『発言集』所収の「一生をかけて私は読んだ」では思春期の読書体験としてラマルティエヌの名前が挙げられているし、「創造的不条理」ではヴェルレーヌやランボオの名前が挙げられている。同じく「創造的不条理」、それから『生きてあり続けること』や『ある島の可能性』といった作品には、ボードレールの名前も登場する。さらに言えば、シモン・サン＝トンジュは論文「ウエルベックの美学について」で『闘争領域の拡大』で使用されている語彙にロートレアモンからの影響があると指摘している²⁹。このような事情を踏まえると、ウエルベックが十九世紀の詩に関心をもっていたと考えるのは妥当であると言える。

こうした十九世紀フランスの詩人のなかでも、とりわけボードレールの存在は欠かせない。ノゲーズがウエルベックのことを「スーパーマーケットのボードレール」と呼んだのはあまりにも有名であるが、ウエルベック自身が、「時折、ボードレールは自身の前に提示された世界を眼差した第一人者だと感じる。いずれにせよ、詩においては第一人者である³⁰」と、ボードレールへの賞賛を公にしている。同様に、本稿でも取り上げている『生きてあり続けること』がボードレールの「若い文学者への忠告」のようなものであるともウエルベックは語っている³¹。

詩で使用されている語彙のレベルでも、ボードレールからの影響が指摘される。たとえばパラントーは、先に読んだウエルベックの「大型スーパーマーケット——十一月」とボードレールの「アホウドリ」（『悪の華』所収）の類似を指摘している³²。彼によると、ウエルベックの詩篇の「私の歩みはぎこちなかった。」という一節における「ぎこちない」（gauche）という言葉は、「この翼をもつ旅人の、なんとぎこちなく、だらしなことか！〔*« Ce voyageur ailé, comme il est gauche et veule ! »*³³〕」に由来する。その根拠として、詩篇「アホウドリ」でも、詩人に重ねられたこの鳥が、人間に虐げられている点を挙げる。このようなパラントーの指摘には説得力がある。だが、ボードレールの「アホウドリ＝詩人」は名誉を回復することができるが、ウエルベックの「私＝詩人」にはそれができないという点を忘れてはならないだろう。前者の場合、地上では羽が邪魔で歩くのもぎこちなくとも、第四詩節にあるように、ひとたび空に飛べば「大雲の王子〔*« Le Poète*

²⁹ Simon St-Onge, « De l'esthétique houellebecquienne », in *Michel Houellebecq sous la loupe*, op. cit., p. 69-80.

³⁰ « J'ai parfois le sentiment que Baudelaire a été le premier à voir le monde posé devant lui. En tout cas, le premier dans la poésie. », Marc Weitzmann, « Zone dépressif », in *Les Inrockuptibles : Hors-série Houellebecq*, 2005, p. 53.

³¹ « Rester vivant », entretien Avec Jean de Loisy, *Le magazine du palais de Tokyo*, Palais 23, Flammarion, 2016, p. 12.

³² Olivier Parenteau, *Un peu en marge : Houellebecq poète*, op. cit., p. 51.

³³ Charles Baudelaire, « L'Albatros », *Les Fleurs du mal*, in *Œuvres complètes*, tome I, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Paris, Gallimard : coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, p. 10.

est semblable au prince des nuées³⁴」になる。対してウエルベックの詩の主体は、転倒してしまったことを恥じて、「平静を装う」ことしかできない。

ウエルベックに対するボードレールの影響という点について、インスブルック大学のジュリア・プロルも論文「ミシェル・ウエルベックの都会的詩：シャルル・ボードレールの模倣か」で、憂鬱^{スプリーン}の描写、大都市の機能、詩人の苦痛という三つの観点から両者の作品を比較した。詩人の生に死が入り混じるという点、都市の風景を描いている点（たとえば『幸福の追求』には、「午後のパストゥール通り」という詩があり、その題名はパリの十五区に本当にある通りの名を示している）等は、たしかにボードレールとウエルベックが共有している点である。しかしながら、だからといってウエルベックがボードレールのやり方を完全に模倣しているわけではない。たとえば両者では、都市の散歩者の役割が異なる。都市や群衆から陶酔を引き出す散歩者像を提示したボードレールと異なり、ウエルベックにとって散歩とは悪夢のような彷徨であるとプロルは指摘する³⁵。たとえば『闘争の感覚』所収の「分配——消費」という詩篇の第三部は、「私」が一匹の猫と出会う様が描かれている。その冒頭のみ訳読してみよう。

J'ai croisée un chat de gouttière,

Son regard m'a tétanisé ;

Le chat gisait dans la poussière,

Des légions d'insectes en sortaient.³⁶

私はどら猫と遭遇した、

その猫の視線に私は釘付けになった。

猫は塵芥のなかで横たわっていて、

多くの虫がそこから出てきていた。

プロルも注目したように³⁷、八音節の交差韻で書かれたこの箇所「私」が出会うどら猫は、既に死骸である。そのことは、猫の体内から多くの虫が出てきているという描写からわかる。詩人の視線を奪うのは、先に取り上げた「安らぎ」という詩篇にあった「蛆虫の群れ [un essaim de vers]」に似た「多くの虫 [Des légions d'insectes]」である。こうしたおぞましいイメージと出会い、ややもすれば希死念慮につながる「苦痛」を引き起こすきっかけとなる散歩はもはや喜びの源泉ではない。ボードレールの詩の主体と異なり、ウエルベックの詩の主体は都会的なダンディのようには振る舞えないのである。

プロルが取り上げたボードレールとウエルベックの差異に加え、自身がアルコールと薬物の依存症だったボードレールとウエルベックの詩の主体の隔たりは、「酔い」がもたらす効果にもあらわれている。言うまでもなく、ボードレールにとって「酔い」とはこの世の外へといざなわれるために不可欠のものだった。『パリの憂鬱』に収められた散文詩「酔いたまえ」の冒頭には次のように書かれている。

Il faut être toujours ivre. Tout est là : c'est l'unique

question. Pour ne pas sentir l'horrible fardeau du

常に酔っていなければならない。すべてが

そこにある。それが唯一の問題だ。お前の

³⁴ Ibid.

³⁵ Julia Pröll, « La poésie urbaine de Michel Houellebecq : sur les pas de Charles Baudelaire ? », in *Michel Houellebecq sous la loupe*, op. cit., p. 63.

³⁶ Michel Houellebecq, « Répartition — Consommation III », *Sens du combat*, in *Poésie*, op. cit., p. 71.

³⁷ Julia Pröll, « La poésie urbaine de Michel Houellebecq : sur les pas de Charles Baudelaire ? », art. cit., p. 63.

Temps qui brise vos épaules et vous penche vers la terre, il faut vous enivrer sans trêve.

Mais de quoi ? De vin, de poésie, ou de vertu, à votre guise. Mais enivrez-vous.³⁸

肩を砕き地面へとよろめかす恐ろしい
〈時〉の重荷を感じないために、絶えず酔
っていないなければならない。
だが何で酔うのか。葡萄酒、詩、美德、お
前の好きなように。とにかく酔いたまえ。

アルコールはもちろん、詩や美德といった何でも良いので、酩酊状態を保たねばならないというのがボードレールの主張である。「〈時〉によって苦しめられる奴隷にならないように³⁹」するために、絶えず酔わねばならないのだ。だが、ボードレールにとっては何よりも重要だった「酔い」は、ウエルベックの詩の主体にとっては問題にならない。なぜなら後者の場合、「酔い」の状態を恥じていることが多く、誇りをもたないからである。その例として『幸福の追求』所収の「外の世界」という詩篇を抜粋して取り上げたい。

Il y a quelque chose de mort au fond de moi,	死にまつわる何かが私の奥底にある、
Une vague nécrose une absence de joie	漠然とした壊死、喜びの不在がある
Je transporte avec moi une parcelle d'hiver,	冬の切れ端を私は運んでいて、
Au milieu de Paris je vis comme au désert.	パリの中心で砂漠にいるように生きる。
Dans la journée je sors acheter de la bière,	日中に私はビールを買いに出かける、
Dans le supermarché il y a quelques vieillards	スーパーには老人が何人かいる
J'évite facilement leur absence de regard	彼らの視線を意に介さずたやすく逃れ
Et je n'ai guère envie de parler aux caissières.	私はレジの女と話す気もほとんどない。
[...]	[...]
C'est vrai j'ai un peu honte, et je devrais me taire ;	そうだ 私は少し恥じていて、黙るべきな
J'observe tristement l'écoulement des heures ;	のかもしれない。
Les saisons se succèdent dans le monde extérieur. ⁴⁰	私は時間の流れを悲しげに観察する。
	外の世界で四季は次々移り変わってゆく。

まず形式面に触れておくと、この箇所は十二音節と十三音節から構成されているため、前述の特殊なアレクサンドランが用いられていると言える。頁数の都合もあり本稿では掘り下げられないが、途中から詩節が四

³⁸ Charles Baudelaire, « Enivrez-vous », *Le Spleen de Paris*, in *Œuvres complètes*, tome I, *op. cit.*, p. 337.

³⁹ « Pour n'être pas les esclaves martyrisés du Temps, enivrez-vous ; enivrez-vous sans cesse ! », *Ibid.*

⁴⁰ Michel Houellebecq, « Monde extérieur », *La Poursuite du bonheur*, *op. cit.*, p. 177.

行から三行に移行する点も注目に値するだろう。意味内容の面に関して言えば、死を意識した「私」が、パリにいるにもかかわらず砂漠にいるかのように暮らしているという描写からこの詩は始まる。酩酊するためだろうか、「私」は昼間からスーパーマーケットにアルコールを買いに出かける暮らしをしていることが第二詩節で明らかになる。老人たちの視線を気にする様子もなく避け、「レジの女と話す気もほとんどない」この「私」が、社会に適合しているとは言い難い。そして最終詩節では、「私」がこうした自分の生活を「少し恥じて」おり、季節の移り変わりを観察していることがわかる。

この詩篇で重要なのは、「私」が時の流れを十分意識しているという点である。「お前の好きなように、酔いたまえ！」と要請するボードレールに従うならば、アルコールを摂取し「酔い」の状態に至ることによって時の呪縛から逃れることが最優先となる。それにもかかわらず、アルコールが手元にあるはずのウエルベックの詩の主体は「時間の流れを悲しげに観察する」。つまり彼にとっては、完全に「酔い」に身を任せることは不可能なのである。こうした「酔い」の不可能性は、「酔い」の可能性を含む自分の生活を「少し恥じて」いるという「酔い」に対する恥の意識から生じる。ウエルベックの詩の主体は「酔い」を信じ切ることができず、それゆえに、ボードレールの詩の主体とは異なり、彼にとって時とは忘れ去ることのできないものになる。

『幸福の追求』所収の「和解することなく」という別の詩篇での「私の父」の描写にもまた、この恥としての「酔い」と時の問題が関わる。

Mon père était un con solitaire et barbare ;

Ivre de déception, seul devant sa télé,

Il ruminait des plans fragiles et très bizarres,

Sa grande joie étant de les voir capoter.

[...]

Il mourut en avril, gémissant et perplexe ;

Son regard trahissait une infinie colère.

Toutes les trois minutes il insultait ma mère,

Critiquait le printemps, ricanait sur le sexe.

À la fin, juste avant l'agonie terminale,

Un bref apaisement parcourut sa poitrine.

Il sourit en disant : « Je baigne dans mon urine »,

Et puis il s'éteignit avec un léger râle⁴¹.

私の父は孤独で粗野な馬鹿者だった。

テレビの前でただ、失望に酔いしれ、

父は脆く珍奇な計画に思いを巡らし、

その計画が頓挫するのを眺めるのを大いに楽しんだ。

[...]

唸りながら当惑し、父は四月に死んだ。

父の眼差しは限りない怒りを露見した。

三分毎に父は私の母を侮辱していたし、

春を批判し、セックスを嘲笑っていた。

最期、臨終の直前、

束の間の平穏が父の胸を駆けた。

「小便のなかで泳いでいる」と言い彼は微笑んだ、

そして少し喘ぎ彼は息絶えた。

⁴¹ Michel Houellebecq, « Non réconcilié », *Ibid.*, p. 144.

「和解することなく」という題が示すのは、父と息子の関係である。「私の父は孤独で粗野な馬鹿者だった」という第一詩行から、「私」と父の関係が良好ではなかったことがわかる。非常に奇妙な計画を考えては、それが失敗することに喜びを見出し、母を侮辱し、何に対しても冷笑的で死んでいったこの父を、「私」である詩人は批判的に描いている。また、生前の父の性格を半過去形で書いた詩節に対して、単純過去で書かれた最後の二詩節からは、父の死を単なる客観的な事実として受け入れている「私」の様子がうかがえる。

この詩篇で第一に注目すべきは、この父親が「失望に酔いしれた」という点である。ウエルベックの詩での「私」はこうした父を嫌悪し、「酔い」を耐えきれず、恥ずべきものとして捉えている。第二に、この「私」は時間を事細かに記憶している点である。父が死んだのは「四月」で、この男が母を侮辱していたのは「三分毎」だった。こうした箇所からも、「私」が「酔い」による時からの解放に至っていないことがわかる。こうして酔える父と酔えない「私」という区別がはっきりと据えられる。

以上の分析を経た後に振り返ると、先に引用した「大型スーパーマーケット——十一月」にもまた、「酔い」の問題が潜在していたことに気がつく。「着飾った郊外居住者」が行き交っていたのは飲料水売り場だった。彼らがこの売場を行き交うことには意味がある。フランスのスーパーマーケットでの飲料水売り場は、もちろん、アルコール売り場と分けられている。これを踏まえると、前者の売場を行き来する郊外居住者はアルコールを求めていないことが示唆される。それに対して「足取りがぎこちない」と描写される「私」は、アルコールを既に摂取しているがゆえに、足元がおぼつかないという可能性が生じる。だから、素面の人が行き交うことができる飲料水売り場に居心地の悪さを感じていたのかもしれない。したがって、飲料水とアルコールの対比によって示唆されるのは、社会に溶け込んでいるかどうかということなのである。もっとも、先に確認したように、アルコールに依存してもこの「私」は酔うことはできないのだけれども。

ボードレールにとって「酔い」の状態であり続けることは一種の定言命法だった。だがウエルベックにとって「酔い」はもはや問題にならない。常に酔っていたとしても感じてしまう時の重荷、すなわち「苦痛」はウエルベックの詩に依然として留まるのである。

3. 「苦痛」と矛盾

詩人を自殺衝動から守ってくれると信じられている「構造」が韻律によって築かれる。が、これをも上回る「苦痛」がウエルベックの詩にはある。この「苦痛」には「酔い」さえも通用せず、恐ろしい時の重荷を感じずにはいられない。時の問題、それは生と死に大きく関わる年齢の問題であると言える。年齢に関わる問題提起は、『闘争領域の拡大』以来ウエルベックの小説のなかで一貫してなされてきた。同様の問題が、詩のなかにも見つかる。事実、ウエルベックの詩のいたるところで若さや老いといった主題を確認できる。

『幸福の追求』所収の「私は病院が好きだ、苦痛から逃れる場所……」は、この問題を扱っている詩篇のひとつである。その全文を以下に掲げたい。

J'aime les hôpitaux, asiles de souffrance

私が好きな病院は、苦痛から逃れる場所

Où les vieux oubliés se transforment en organes

忘れられた老人たちは器官へと姿を変えて

Sous les regards moqueurs et pleins d'indifférence	バナナを食べながら働いている
Des internes qui se grattent en mangeant des bananes.	内勤研修医たちのからかいの視線や多くの無関心にさらされている。
Dans leurs chambres hygiéniques et cependant sordides	
On distingue très bien le néant qui les guette	老人たちの部屋は衛生的だが汚らしく
Surtout quand le matin ils se dressent, livides,	彼らを脅かしている虚無がはっきりとわかる
Et réclament en geignant leur première cigarette.	特に朝、血の気の失せた老人たちが身を起こし、 呻きながら目覚めの一服を求めるとき。
Les vieux savent pleurer avec un bruit minime,	
Ils oublient les pensées et ils oublient les gestes	老人たちはごく僅かな音を立て泣く術を心得ている、
Ils ne rient plus beaucoup, et tout ce qui leur reste	彼らは思考を忘れ 身振りを忘れ
Au bout de quelques mois, avant la phase ultime,	もう多くは笑わない、彼らに残されているものといえば、 幾月かの果て、臨終の前の、
Ce sont quelques paroles, presque toujours les mêmes ;	
Merci je n'ai pas faim mon fils viendra dimanche.	ほとんどいつも同じ、数少ない言葉だけ。
Je sens mes intestins, mon fils viendra quand même.	ありがとう 腹は減っていないよ 息子は日曜日にやって
Et le fils n'est pas là, et leurs mains presque blanches. ⁴²	くるんだ。 どうも腸に違和感があるんだ、それでも息子はやってくる らしいんだよ。 その場に息子はいない、ほとんど青白い老人たちの両手。

脚韻は第一詩節、第二詩節、第四詩節が交差韻、第三詩節が抱擁韻である。各詩行は基本的に十二音節で構成されているが、時折十三音節となる。つまり、ウエルベック流の特殊なアレクサンドランである。

ウエルベックの詩作品における「笑い」について論じるために、パラントーが論文「ウエルベックの詩のなかにある笑いの源泉、兆候、そして意味」で分析対象のひとつとしたのがこの詩篇だった。まずパラントーは第一詩節で区別される二つのコミュニティに注目する⁴³。ひとつは「苦痛」を被っている老人たちのコミュニティで、もうひとつはその「苦痛」によって給与を得ている内勤研修医たちのコミュニティである。選抜試験に合格し病院に勤める若者たちの「からかい」や「無関心」を含んだ眼差しは、一種の優越感を示

⁴² Michel Houellebecq, « J'aime les hôpitaux, asiles de souffrance », *Ibid.*, p. 149.

⁴³ Olivier Parenteau, « Sources, signes et sens du rire dans la poésie houellebecquienne », in *Houellebecq entre poème et prose*, op. cit., p. 55.

している。つまり「忘れられた老人たち」が迫りくる死に直面しているのに対して、若き内勤研修医たちは生を誇っているのである。彼らにとって年寄りの患者は、循環器や消化器のような「器官」としてのみ意味をもつ。医学的な知識によって、研修医たちは権力を手にする。老人たちは一種の物と化し、肉体は生気を失い、「苦痛」に苛まれるようになる。こうして物として捉えられてしまう老人たちの部屋は、第二詩節にあるように、衛生的でこそあれ汚らしい様子となる。この様子は、死を待つ老人たちを脅かす「虚無」であると表現されている。そして、こうした境遇にある老人たちは「もう多くは笑わない」のである。

ところで、この詩で「私」が研修医と老人のどちらのコミュニティに属するのか考えてみたい。パラントーが提示した解釈は、「私」が導入されることで、研修医側の滑稽さが暴かれるというものだった⁴⁴。たしかに、「私が好きな病院」と語っているため、一見するとこの「私」も老人の側に立っており、普段は隠されている「バナナを食べながら働いている／内勤研修医たちのからかいの視線や多くの無関心」を風刺しているように思われる。だが最後の詩節を読むと、内勤研修医のように、「私」も老人を嘲っているように見える。その理由は、死の直前の老人たちが看護師や病室への来訪者に伝えることのできる「ありがとう 腹は減っていないよ」や「息子は日曜日にやってくるんだ」といった表現と、最後の詩行で「私」が語る「その場に息子はいない、ほとんど青白い老人たちの両手」のあいだに落差があるからである。老人は、単純未来形で、近い内に自分に会いに来てくれることになっている息子について語る。だが今度は「私」によって、現在形で、その息子が今そこにはいないことが示される。来るはずの息子とその不在という現実。時制の違いによって、老人と「私」の発話は、それぞれ異なる時間を指し示していることがわかる。これらの詩行が六音節毎に区切りが置かれた完璧なアレクサンドランなだけに、老人たちの期待に不安や絶望といった「苦痛」を感じ取るのは困難である。にもかかわらず、「その場に息子はいない、ほとんど青白い老人たちの両手」という一文は、その期待が無情にも裏切られることを示唆している。そのため、「私」は老人を裏切る立場に与しているとも言える⁴⁵。

重要なのは、病院が「私」にとって「苦痛から逃れる場所」であるという点である。先に指摘したとおり、「私」は若者側にも老人側にも立っていない。あるいはどちらの味方でもある。この矛盾が、ある場所にある二面性を観察し成立させる役割を「私」に与える。病院という場において、科学的な知識に基づく権力を有する内勤研修医は老人の支配者である。反対に、老人は被支配者である。若者であるが老人でもあり、かつ若者ではないが老人でもない「私」は支配関係に巻き込まれることがない。言い換えるなら、先に取り上げた詩篇とは異なり、社会から距離を保っている。このことが実現可能なのは、どちらでもないし、どちらでもあるという矛盾のおかげなのだ。病院は、それゆえ「苦痛から逃れる場所」と呼ばれるのである。

以上のように考えると、前節までに確認してきた「構造」や「酔い」の捉え方が変わってくる。なぜなら、アレクサンドランと十二音節を超え出る音節の二面性や、「酔い」によって時間から解放される者とそうでない者の二面性を観察すること自体が、「苦痛から逃れる場所」を模索する条件であることがわかったから

⁴⁴ *Ibid.*, p. 56.

⁴⁵ ここで使用されている「それでも quand même」が、ある事実の反対側を提示する言い回しである点も注目に値する。老人は「どうも腸に違和感がある」と訴えるが、「[腸の調子が悪いのに] それでも息子はやってくるらしい」という未来の出来事を疎ましく思っているとも読み取れるからである。この場合「私」は、今現在「その場に息子はいない」のに、近い将来やってくる息子を既に疎ましく思っている老人をせせら笑っていると言える。したがって、やはり「私」は老人とは異なる立場にあるように思われる。

である。無音の「e」によって欠陥部があえて残された「構造」は、完璧でないし完璧である。「酔い」が回らぬアルコール中毒者は、時間から逃れられないし逃れている。ウエルベックの詩が示しているのは、どちらでもないし、どちらでもあるという矛盾の場でしか詩が成立しないということなのである。したがって、築き上げられた「構造」に亀裂が入ったり、「酔い」を恥じる主体がアルコールを求めたりするのは、それが詩である限りにおいて当然の成り行きである⁴⁶。

そしてウエルベックはこのように働く詩的な場を、一方と他方の境界をぼかす「霧」に包まれた空間になぞらえる。彼は「創造的不条理」で「境界を溶かし、世界が差異を孕みにくい同質的な全体になることに参与するものはすべて、詩的な力の痕跡を留めている（たとえば霧や黄昏も同様に詩的である）」⁴⁷と書いた。同様に、『発言集』所収の「空、大地、太陽。」という短いテキストでも、現代における効果が疑われつつもその美しさを称賛される「霧」が詩にたとえられる。

霧では足りない。現代には足りない。霧は十分に物質的ではない——詩と比較してもよいだろう。雲なら、そのなかで生活している場合には、充分かもしれない。霧は足りない。だが、海に立ち込める霧ほど美しいものは、この世界に存在しない。⁴⁸

言うまでもなく、いつしか「霧」は晴れる。矛盾が成り立つ「苦痛から逃れる場所」は一時的なものに過ぎず「苦痛」に終わりはやってこない。だが、新たな「霧」を求め、詩人はふたたび歩き出すだろう。

結語に代えて

以上、ウエルベックの『幸福の追求』の読解のために、「苦痛」という言葉をめぐって具体的な詩篇を分析してきた。本稿で試みた分析により明らかになったことは三点ある。一点目は、詩の源泉であるが放っておくと自死を導く「苦痛」を抑え込むために、ウエルベックは「構造」や「酔い」を活用しているということである。二点目は、こうした「構造」や「酔い」で「苦痛」を完全に和らげることができないということである。そして三点目は「構造」や「酔い」が不完全だからこそ、「苦痛」と「苦痛から逃れる場所」の共存が可能になり、この矛盾によって詩が成立するということである。

本稿が提示しようとした解釈によって、『幸福の追求』という詩集の題が表すものも理解できるようになるだろう。そもそもウエルベックは、『生きてあり続けること』の第三部「生き続けること」の最後に、「幸福を恐れるな。存在しないのだから⁴⁹」と書いていた。存在しないはずの幸福を追求するという矛盾。そしてこの矛盾を追い求めるがゆえに、詩人に永遠につきまとう「苦痛」。この二つこそがウエルベックの詩を成り立たせているのだから、詩集の題もまたこの上なく詩的なものである。

⁴⁶ 詩人が受け入れねばならないこのような矛盾は、『生きてあり続けること』での「形式に関しては、矛盾したことを言うのを決して躊躇してはならない」[« Au sujet de la forme, n'hésitez jamais à vous contredire. »] という一節を思い起こさせる。 Voir: Michel Houellebecq, *Rester vivant*, op. cit., p. 18.

⁴⁷ Michel Houellebecq, « L'absurdité créatrice » in *Interventions 2020*, op. cit., p. 75-76. [ミシェル・ウエルベック「創造的不条理」『発言集』前掲書、61頁。]

⁴⁸ Michel Houellebecq, « Ciel, terre, soleil. » in *Interventions 2020*, op. cit., p. 218. [ミシェル・ウエルベック「空、大地、太陽。」『発言集』前掲書、162頁。]

⁴⁹ « N'ayez pas peur du bonheur ; il n'existe pas. » Michel Houellebecq, *Rester vivant*, op. cit., p. 23.

一方で、本稿では『幸福の追求』の詩篇の一部しか分析できず、アレクサンドランで書かれた詩篇を中心に読解したため八音節、十音節といった十二音節以外のフランス詩に伝統的な韻律の分析に踏み込むこともできなかった。また、ウエルベックにおける自由詩や散文詩といった文学ジャンルにかかわる問いも深く掘り下げられなかった。これらの課題については稿を改め論じ、『闘争の感覚』以降のウエルベックの詩も継続して分析していきたい。